
I don't know

五十嵐 イツキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I d o n ' t k n o w

【Nコード】

N 1 6 1 3 E

【作者名】

五十嵐 イツキ

【あらすじ】

俺はごく普通の高校生だった。勉強、普通。スポーツ上の下。ルックス普通。　　そうだったはずなのに。わかんねえ。なんだ、ここ？なんで俺はこんな所で銃を握っているんだ？I d o n ' t k n o w . 俺は知らないぞ、こんなの・・・！彼等の残酷なる運命。死の恐怖と、殺らなきゃ殺られる世界に怯える生活。突然マフィアの世界に引き込まれた隆哉、棗、花梨、伊織。困惑と運命の残酷さに振り回される四人は・・・。「違う、必然だったんだ。俺達が此処にいるのは」

序章

「兄さん・・・兄さん、兄さん！！！」

嫌だ、嫌だ、嫌だ！！！！

母さんが、父さんが！兄さん。助けて、兄さん。

「かえつてきて！かえつてよ兄さあん！いや、いやだよおおお
お！！！」

僕が弱いから。僕が兄さんを巻き込んだんだ。

こんな中途半端な力なんていない！

大好きな家族を・・・護れない力なんて、捨ててしまえばいい！

そうだ、目だ。目を捨てちゃえば僕は何も見えない。

そうすれば・・・何も、何も。

燃えるような赤いソレに染まった、小さな手でガラスの破片を握る。

「おいっ！？やめ、やめろ！やめ」

にこりと微笑んで、縦に瞼を切り裂く。

つもりだった破片は目にたどり着く前に最愛の兄の手によって阻止

された。

ぎゅっと抱きしめられて、兄さんの髪が頬にくすぐったい。頬に流れる生暖かい物は先についていたソレと混ざって、地に落ちた。

「・・・ごめん、ごめんなあ」

兄さんの謝る声を聞きながら、僕は目の前が真っ暗になっていくのがわかった。

ブツリ と意識が途絶えて。それから何もわからなくなった。

少年は、嘆いた。

己の無力と、己の力を。

「ねえーお母さん」

聞いている？と問うものもお母さんは私を背に押し込むばかりでちっとも答えてくれない。

ねえお母さん？あのお兄さん達誰？

どうしてあのお兄さん体が真っ赤なの？

どうしてお父さんはあそこで真っ赤になって倒れているの？

どうして、このお兄さん達は

「いい？絶対此処からでちゃ駄目よ？いい子にしているね」

頭をそつと撫でられて、ぎゅつと抱きしめられて。

うふふ お母さんったら甘えん坊ね。大丈夫よ、お母さんの言うこと聞くよ。

答えると、母さんは泣きながら笑った。変なの。

「ほら、耳を塞いで。これから先は何も喋っちゃ駄目よ。目も閉じて　　そう、いい子ね」

元々暗かったのに、私の目にはもう何も見えない。優しいお母さんの声が耳をかすめて

さようなら

「お願い・・・あなただけでも、生きて」

少女は嘆いた

己の無知と、己の力を。

誰もボクらの変化に気が付かない。

ほら、入れ替わったって気付きゃしないじゃないか。

ボクらは話さなくなたって通じ合うのにな。

「悲しいな」

「悲しいね」

叔母さんとはもかくね、母さんも父さんも気付いていない。いつもボクらを間違える。

「僕とお前は違うのにな」

「お前と僕も違うのにな」

姉さん・・・姉さんはボクらの違いをわかってくれる。

いつもボクらの悪戯を見ては怒って、叩いて・・・最後は本気で笑い飛ばしてくれる。

あれ　　？

「「姉さんは、どこ？」」

いない、いない。

いない・・・？

「母さん、姉さんどこにいったの？」

「父さん、姉さんどこにいったの？」

ちよつと、泣いてないで答えてよ。いつもはボクらが泣いても“泣くな！”って怒るくせに。

真っ赤に染まった目を擦って、溢れる涙を拭って・・・母さんはボ

くらを抱きしめた。

「姉さんは、遠い所にいったの」

「それってどこ？」

迎えに行かなきゃ。

気が強いくせにすぐ迷子になる姉さんだしね。ボクらが迎えにいかないで泣いちゃうじゃん。

母さんは答えない。父さんは背を向けてボクらのほつを見ようともしない。

「ちょっとー、聞いてる？」

ボクらを抱く手に力を込めて、振るえる声で母さんは言った。

「お願い……行かないで」

あなたたちは、どこにも行かないで。

少年達は嘆いた

己の柵を、己達の力を。

何も知らない彼らは

何もわからない彼らは

ただただ、嘆いた

．．．2009 / 05 / 10 / 18 : 26

事の始まりはよくわからない。

取り合えず俺は、学校でばおつと授業受けて双子と一緒に帰りの電車に乗り込んだ。そのあとは生活のためにしているコンビニのバイトに行つて、ご飯を食べて、お風呂入つて寝るだけだったはずだ。

そうだ、そんな平凡男子の俺が。

こんな所で銃を握ってるわけなんか無いんだ。

つてか、ここ何処だ??

白い壁、遠くのほうに人の形をしたようなものがある。警察系の映画とかでよく見る射撃場、みたいだな．．．。

「なんだ．．．ここは．．．?」

周りには誰もいないのに呟いてみる。混乱で頭が可笑しくなりそう
だ。

ふと自分がとても危険な武器を持っていることを思い出して、そのまま銃を取り落としてしまいそうになった。投げ捨ててしまいそうになるその手を止めたのは、双子の片割れが“誤動作を起こす可能

性があるから銃器類は丁寧に扱わなければならぬ”と自慢げに語っていたのを思い出したから。震える手をどうにか動かして小型の銃を床にそつと置いた。

俺だって男だし、モデルガンやエアガンなら持ったことはある。もしかしたらその類であるかもしれないのに、俺はなんでこんな情けなく怯えてるのか。・・・否、本能で感じ取ったのだろう。目の前に在るのは人の命を奪える凶悪な武器だ。

そのまま床に身を投げた。受身など取らずに背中から思いっきり。衝撃で体が小さくバウンドして目の覚めるような痛みが脊髄を震わす。この痛みは、決して夢じゃない・・・。

ああ、俺は何故こんな所に居る？記憶がどうにも曖昧で電車に乗った直後までしか覚えてない。まさか記憶障害？いや、ぼんやりとだが誰かと会話をしていたような気がしないでもない。

思考に没頭する前に、真っ白な壁に切れ目が入り思考の波に沈むことはなくなつた。警戒していた俺は思いっきり体を引き起こし、手探りで先ほどまで見たくもないと視線を逸らしてたソレを探る。切れ目は大きく開き、軋むような独特の音が鳴り響く。わかりにくいこと極まりないが、どうやら扉だったようだ。

開いた扉から男が身を滑り込ませて入ってきた。硬質の床であるにも関わらず男の足音は此方まで聞こえてこない。たったそれだけの

動作を見て、“こいつは、ヤバイ”と判断できてしまった自分に一番驚いた。

彼は俺に冷たい目を向けた。背筋を冷たい手でなぞられた様な嫌な感覚が刹那起こった。

「……気がついたのか……。」

男は低い声で呟くようにいうと俺に歩み寄ってきた。白いニット帽から覗く赤い髪が揺れ、芯のぶれない綺麗な歩みにゾクゾクと背筋は凍るばかり。

男のその手には銃があった。

殺されるっ!?

思わずやっつと発見した銃を夢中で掴み取った。男に銃口を向けて、震える指を引き金に置いた。

いやだ、死にたくない。こんなワケのわからない所で死にたくない!

一連の動作は勿論男には見えているはずなのに彼は歩みは全くぶれない。人の命を消してしまえるような危険な物を向けられているというのに、彼はそれを全く意に關しないかのように振舞う。いや、本当に気にしていないのか!?

「とっ、止まれよッ!」

恐怖でひっくり返った声を出した。しかし今はそれを恥ずかしいと

考える余裕もない。

赤髪の男は鋭く俺を睨むと太腿に着いているらしいショルダーに銃をしまった。が、やっぱり足は止めなかった。

「こ、ここはどこなんだ！何のために・・・何のために、俺はここに
いるんだ！答えるよッ！！」

男は無表情のまま早足で俺のほうにやってくる。一步一步と確実に
近づく脅威に、俺は腰の抜けた体をずるずると後退させながら叫ん
だ。

男は面倒くさそうにため息を付いて顔を顰めると”うるせえなあ・
・”と呟いた。ボソボソと小さな声だったために、その声は恐怖で
一杯になっっている俺には聞こえない。

「銃を降ろせ。邪魔だ。」

「黙れ！質問に答えるよ！！」

必死に足を動かしているはずなのに、体はそれ以上下がらない。何
でだ！と視線を背にやると、そこは真っ白な壁。アドレナリン効果
かなんだか知らないが、正常に体は作動していないようだ。男は俺
との距離あと一メートルという所で止まった。
冷たい目で見下ろされていると感覚が狂いそうだ。

「・・・その質問の答えは後です。銃を降ろして俺について来い。」

なんでコイツはこんなに命令口調なんだ・・・。冷たい視線に気圧
され自然、手は銃を下ろそうとした。

いや、そんなことしたらそれこそ何されるかわかりやーしないじゃ
ないか！

「騙されるかよ……。そう言っておいて後で殺す気なんだろ！」
この男ほどではないが俺の出来る限りできつく睨んでやった。
男は気圧されて……。くれればいいのだが、そんなウマくはいかな
かった。

男はそれどころか口元にぞっとするような笑みを浮かべて銃口に手
をかぶせた。俺は引き金を引く勇氣すらなく、されるがままにそれ
を見ていた。

「セーフティすら外していないその拳銃オモチャで、人を撃とうなど……
笑わせる。」

軽く握られ引かれただけで、唯一の武器はスルリと手からすり抜け
ていった。放心する俺に男は更に顔を近づけ小さく言った。

「付いて来い。竜道 棗・花梨。二人がどうなるか、わかるか？」

驚いて目を見張った。どうしてこの男の口から二人の名前が出てく
るのか。

電車で一緒だったじゃないかなどという考えに及ぶはずもなく、俺
はその答えを頭に巡らせショートした。

俺が着いていかないと二人が殺されるかもしれない。

俺に何かを考えている暇はない。二人を救うために俺は何をすべき
だ？

「・・・わかったよ・・・」

ふっ、と口角だけ引き上げる冷笑を零して男は俺に手を差し伸べた。白い手袋を纏ったその手を刹那見詰めてから思いつきり掴んだ。せめてもの仕返しのつもりだったのだが、彼は俺の力以上に強い握力で握りそのまま無理矢理俺を立たせたのだった。

まだ膝が震えているじゃないか。これじゃ立てないのも当たり前前だ。

男は静かに名乗った。

「俺は零夜だ。働きを期待している、オブシディアン。」

そしてまた、あのぞつとするような笑みを浮かべた。

力チリ、と

頭の奥で錠が音を立てた

翼を持たぬ愚かな彼は

まだ、気が付かない

気がつけない

．．．2009/5/10/18:48

見たことのないはずの一面の白に見覚えがある気がするのは何故だろうか。

遠い遠い昔の記憶にぼつっとこの壁を見詰めていたような．．．。

そんな気がするの、何故だろう。

男はあの白い扉を開けた。振り返り顎で促していく零夜に、俺は黙って着いて行くしかなかった。むかつ腹はたつがいちいち抵抗していたら．．．殺される。この冷たい目に。

出たのは部屋よりも一段暗い通路。勿論というべきかそこも真っ白だった。まるで映画で見る隔離病棟のような不気味な雰囲気にもたもた怖気が走る。そんな俺を一瞥し、零夜は少し長い赤い髪を揺らしながら早足で歩いていく。

にしても、この男．．．。

俺は彼の後をのそのそと着いて行きながら考えた。

俺達をどうするつもりなんだ。双子はともかく、別に俺を拉致しても身代金なんかもらえないだろう。先ほどのこの男の言い方だと、まるで俺が目的のようだった。棗と花梨は俺を脅す道具のような・
・無機質な言い分だった。俺の勘違いか？

しかしへタレな俺はそのことを聞く勇氣は無く、無言で暗い通路を歩く。

二人分の足音しか響かない廊下。この場所自体が俺を拒否してるみたいなおーラが出ていて、パニック状態が続く。ああ、足がまた震えてきた。

「入れ」

拷問かと錯覚するような長い沈黙の後、突然零夜が扉をあけて中に入るように促す。

頷いて従おうとするものも、足が竦んでなかなか動かない。零夜はそんな俺を鼻で笑うと、背中を押して中へ押し込んだ。

「・・・棗、花梨・・・っ」

「「隆哉!!!!!!」」

ああ、さすが双子だ・・・。
こんな時でもぴったり八モった二つの声。

竜道 棗、そして竜道 花梨。俺の親友達。

おそらく・・・俺が巻き込んでしまった、大切な二人。

どこか申し訳なくて入ったそこから一步も動けないで居ると、焦れた双子は二人して俺に飛びついてきた。棗か花梨かわからないが、どちらかの腕が俺の首に当たりラリアットのようにつぶつぶ飛ばされてしまった。

「ぐえっ」

「うわっひでえ、隆哉！」

「・・・俺、なんもしてねえのに・・・ッ・・・」

・・・棗、お前だな。俺の耳にはしっかりお前の笑い声が聞こえたぞ！！

痛い喉を押さえて棗を睨む。棗は声は悲しそうだが目は笑っていた。ためえいつかゼツテエ同じ目にあわせてやるからな！

二人は微笑んだ。花梨は少し不安そうな目だった。

「お前等。来い。」

少し和んだ空気に北風のように冷たい声が掠めた。風上に目を向けると零夜が奥の扉を開けていた。勿論・・・さっきまでそんなものはなかった。

目配せをしあつた俺達はゆっくりとその扉と零夜のもとへ行つた。

またあの暗い通路を歩く。違うのは足音の数。複雑に入り組んでいるらしい通路は、同じような風景を右へ左へとくねくね進む。歩いてるだけで酔っちまいそう、うえ・・・。

「・・・な、なあ」

「なんだ。」

意を決して話しかけた俺だが、喉から漏れたのは怯えてつかえた声で・・・ああ俺ホント情けねえ。横を歩く二人はじつと俺を見詰め、零夜は前を向いて歩いたまま気のない返事だけ返した。

「俺達は一体どうなるんだ？」

「それは俺ではなく、これから会うお方に聞け。」

単調に答えると零夜は突然止まった。そんな彼の真後ろを着いていた花梨は零夜にモロに鼻からぶつかつた。“うわあ！”と小さく悲鳴を上げて花梨は泣きそうな目をした。いや、むしろ半泣きだ。

着いたぞ・・・。

零夜はそう呟いて扉を開けた。

その部屋は最早当然というべきか、本当に白かつた。何処を見ても真っ白で机も椅子も・・・何もかもが白かつた。雪のような淡い色彩ではなく人口の白に目が眩む。

ただ、一つだけ白くない物。

爽やかな茶髪の男が笑っていた。

「ようこそ。我がファミリーへ」

・・・ファミリー・・・？

ファミリーって・・・【family】だよな。家族・・・族・・・郡・・・？？

・・・はあ？？

俺が混乱して目が回っていると棗がよろめきながら一步前に出た。

「あの・・・俺達、なんでここにいるんですか？？ここは何処なんですか？？」

さすが棗だ。目が泳いでいるが核心をしつかりと口にした。

そんな彼を馬鹿にするわけでも怒るわけでもなく、茶髪の男はさも愉快そうに笑い飛ばした。俺達は男の突然すぎる行動に思考が着いていかず眉根を寄せた。

漸く落ち着いたらしい男はそれでも尚クスクスと笑いながら零夜を軽く叱った。

「零夜、俺の指示にはキチンと従えよ。」

「・・・は。しかし此処まで連れてくるとい指示にはしっかりと従ったはずでは。」

「ばーか！プラス状況を掴ませておけ、だろ」

“そんなこと仰ってませんでした”という声は少し不機嫌になった男の声に掻き消された。

「すまなかった。いあーやっぱり何にも聞いていなかったのかっ！どつりで怯えているわけだ。まあ、一つずつ話そうか。取り合えず・

・
・

ね、花梨君。銃を降ろそうね？」

男の一言に花梨を振り向くと、彼はがたがたと震えて・・・その手には銃が握られていた。銃口は椅子に座る男に向けられて。

涙を流して見開いたその目は、真っ黒な恐怖に染まっていた。

「う、るさい!!」

花梨が大声で叫んだ。

じりつと零夜が彼に近づくと花梨は零夜に”来るなっ”と叫んだ。

零夜は大人しく止まることなどなく、ゆっくりと花梨に近づく。しかし茶髪の男が花梨から目を逸らすことなく”零夜、止まれ”と命令すると、瞬間ロボットのよういきつちり止まった。男は愛しそくに目を細めて口元に微笑みを浮かべた。

「花梨君。やっぱり君は俺の見込んだ通りだね。率直に自分に従う、行動力を持っている」

「だまれ!!お前に何がわかるっ」

花梨は人をも殺せる武器を手にして興奮したのか、一発地面に打った。とても冷たくて大きな音が白い部屋に響いた。棗と俺は固まって何も言えなくなった。びびっただけではない。花梨の目が今までみたこともないほどキレていて・・・情けないことにどうしたらいいか分からなくなったのだ。

花梨は怒りで染まった目を男に向けた。

「俺は本気だ。俺達を解放しろよ。何がファミリーだ!!俺達はま

だ死にたくねーんだ！！」

突然男の笑みが消えた。

冷たくはないが整った顔が恐ろしく見えた。

「花梨君・・・なにか勘違いしてるんじゃないか?？」

「ああ、！！?？」

花梨、こええ・・・。

「俺達は別に君達を殺そうとしているわけではないよ」

「じゃあなんなんだよ」

棗と花梨の声が被った。

男はにっこり笑った。

「君達を俺のファミリーに迎え入れたいんだ」

空気が凍った。零夜さえも押し黙るほどの重い沈黙の後。

「っざげんなよ！！」

棗と花梨がまた八毛った。固まっていた俺もやっと解凍され、噛み付くように男に向かって叫ぶ。

「誰が銃とか持つてる所になんか入るか！！だいたい此処はなんなんだよ！！」

「だから、それを説明しようとしてんだろーが」

零夜が口を開いた。“零夜っ”と男が声をかけるが、彼は男を一瞥しただけだった。コツツと靴音を立てて花梨に一步近づき、花梨は勢い良く振り向いて零夜に銃を向けた。零夜が冷たい笑みを浮かべて両手を上げた。

「・・・此処はマフィアの世界だ。中学生だった君たちを少し見かけてね。他の子とは明らかに違うオーラを見たんだ。“きつとこの子達はファミリーに必要な”と考えたんだ」

時々花梨と棗が突っ込んだが男は全て無視した。

「俺の名前は朱雀。好きなように呼んでくれ。 本当はこんなこと言いたくないんだが・・・。言わなければならぬのだから」

寂しげに眉を下げて朱雀と名乗る青年は笑った。そして、刹那の間をおいてすべての感情をその顔から消し去った彼は絶対零度の視線を向けた。

「君たちはこの運命から逃れることは出来ない。マフィアとして俺の手足の一つになってもらおう」

今まで会った誰よりも強い威圧。ソクと背筋に悪寒が走りぬける。

どこか、自分の中で【逃げられる】と思っていた。こんなドラマみたいなことあるワケない、と。

殺されるはずがない。逃げられないわけがない。・・・俺が人殺しになるなど、有りえないと。

現実を叩きつけられた。

「ツツ！ふ、ふざけんなああああッ！！」

花梨が狂気を宿して吼えた。

朱雀に向けられた銃口。怒りに染まった花梨の目。驚愕の表情を浮かべて彼を止めようとする棗。全てがスローモーションのようにゆっくり動いた。

カッと目の前が赤くなった気がした。

意思の中にあつたのは“花梨を人殺しにしたくない”ということだけ。

俺は、零夜の銃を抜き取った。近くに居た彼の腰のホルスターから抜き去る一連の動作に誰も反応を漏らさなかった。

数瞬遅れて“っおい！？”と零夜は叫んだが気にしねえ。・・・気にしてられない！

花梨が発泡する直前。

俺は彼の銃に標準を向け、撃っていた。

パァンと、乾いた音が鳴り響いた。

映画とは全く違う。引き金を引いた指から腕、肩にかけて強い衝撃が走る。両手で撃って尚、発泡の余韻で手が痺れてしまう。逃げら

れようもない、本物の衝撃。

「あ……たか、や??」

自身が持つ小型の銃の先から煙が立ち、空気に溶け込んだ。はつと意識を取り戻し、震える手の所為で銃を握っていることができずに大きな音を響かせて床に落とした。この場にいるもの全員が俺の行動についていけない。当事者である自分自身でさえも。

花梨は何時もの優しい顔を涙でぐちゃぐちゃにしていた。

「なんで……?」

口から漏れたのは、自分自身への問いかけ。

俺、今何した??

花梨……銃だけど。

花梨を撃った??

叫びたいほどの恐怖が全身を巡った。体がぶるぶると震える。

もし、もしも。

銃弾が花梨に当たっていれば……。

俺は、また大切な物を失っていた。

ふつと鼻から抜けたような笑みを零した。それを零した本人である零夜はそれから可笑しくてたまらないとでも言うようにクツクツと顔を手で覆って笑った。瞳に宿るは小さな狂気。だがそれに気が付く者は一人としていないのだ。

「やっぱりだ！隆哉君、君は天才。どうしても君が欲しかったんだ」

嬉々とした朱雀の声が鼓膜に届いた。

周りは真っ白なのに・・・俺は目の前が真っ暗になり、そのまま気を失った。

ああ、それでも。

失わなくてよかったと、心の底から思った。

．．．2009 / 5 / 10 / 19 : 36

誰かの言い争う声がする。静かで、冷たい二つの声。

ああ、誰だろう。俺の寝室で音を立てないでっっていつも言ってるだろ？

「ボス うしてコイツ ですか？」

「が 選んだ いいんだよ」

「確かに 射撃 抜群に優れて が」

うるさいなあ。俺はまだ眠っていたいんだ。

「なあ零夜。お前もこのやり方に反対か??」

「．．．いえ．．．ボス」

はっきりと彼らの声が聞き取れるようになったとき、世界が急速に

色付き始めた。霧がかつたようにぼやけていた俺の視界も同時に明確になり、言い争っていたと思われる二人の顔を視界に捕らえた。誰だろう、ついさっきまで見てた気がする。

ああ。

答えにたどり着いた瞬間、何処か呆けていた頭が完全に覚醒した。

俺たちはマフィアに連れてこられて、ここに入れって……。
んで……。俺は、花梨を、撃つた。
それから……。気を失って……？

朱雀達はまだ俺が起きたことに気がついていないようだ。

「なら、黙ってる。俺はあの四人が欲しい」

「はっ……。しかし。隆哉、棗、花梨の三人はいいとして……。あの少女は……」

「彼女はあの三人をサポートしてくれる。それに……。すぐにでも此処に馴染んでくれるだろう」

……。四人……。少女……？

朱雀の言葉が淡々と紡がれる。

「彼女は俺がすぐに見つけてくるよ。それまで……。君はあの三人を指導しといてくれ」

「……。わかりました。ボス」

指導……。???

手を突いて起き上がるうとすると決して上等とはいえないベッドが軋んだ。その音で二人とも此方に気がついたようだ。“ああ、よかつた起きたんだね”と言いなながら朱雀は笑顔で俺の傍へと寄ってきた。先ほどの冷たい瞳がフラッシュバックのように蘇る。あまりに鮮やかなので今彼が浮かべている穏やかで優しい笑顔とかぶって恐怖が尚背筋を撫でる。思わず後ろへ身を引くが彼は“さつきはありがとう”と優しく言っつて嫌な顔一つしなかつた。

「起きてたなら俺達の会話は聞いていたかな？君たちには指導を受けてもらおうと思っんだ」

「し、どう？？」

「うん、俺達はそう呼んでいる。新しく入ったメンバーに色々特訓してもらっんだ」

朱雀の言葉がすんなりと頭に入つてきて、“ああこれが普通なんだ”と思えてきた。思わず頷きかけたとき、零夜が口を開いた。

「俺が指導係だ。よろしく」

頭のもやもやが一気にはれた。

冗談じゃねえ！！

カツとなつて体が震えた。

「なんで、俺達が・・・」

花梨が言つていた言葉を呟く。うわ言のように何度も繰り返していると朱雀がそつと毛布をかけなおした。

「さつきも言ったけど、君達は俺のファミリーに必要なんだ。どうか・・・協力してくれないか」

朱雀が頭を下げた。先ほどまではなかった行動に戸惑いを感じ、思わず“あ、頭を上げてください”と呟いてしまった。朱雀はゆっくりと頭をあげ、俺を見た。

悲しみが入り混じった瞳で俺を見詰め・・・穏やかな笑みを見せた。

ああ。

この人は人殺しだ。
マフィアだ。

いい人も何も有るわけがないだろう？
それなのに。

なぜ、この人はこんなに優しい顔をするのだろう。

「君の心配はごもつともだろうが、それでも言わせて貰おうか。俺達は人殺しは最小限に抑えている」

「は??」

思っていたことを言い当てられ間抜けな返事を返した。朱雀は”そんな顔してた”と喋って苦笑いを零した。

「俺達はマフィアと一括りにして同一化しているが、我がミリナードファミリーは警察と政府と結託しているんだ。主な仕事はマフィアの統括と違反ファミリーの通報。簡単に言うとマフィアを取り締

まるマフィアをやってるっぽいよ」

っぽいって・・・なんて、適当なんだ。

「だから、銃も護身用ってだけであまり撃たない。撃たせない、っていうのが正しいかな。それに特訓って言っても、護身術と射撃訓練だよ。当たり前だけど本当に人を撃つわけじゃないしね？」

だから・・・協力してもらえないかな??

最後にそういって、彼は笑った。

なぜ貴方は、そうやって悲しそうな顔で笑うんだ。

貴方と・・・あの人が重なって、溶け合ってしまうじゃないか。

お願いだから、そんな顔して笑わないでくれ。

「・・・返事などいらぬ。行くぞ」

狂気に飲み込まれそうになった俺を引き戻したのは、あれほど恐怖を与えていた零夜の冷たい声だった。

「行くつって・・・どこに??」

ベッドから立ち上がり問いかけた。というか、そもそも俺はまだファミリーに入るなんて一言も言っていないぞ。扉を開けて朱雀を先に出してから、振り向いた零夜は俺に向かってニヤツと笑いかけた。背中に寒気が走ったのは言うまでも無い。それほどまでに彼の笑みは悪魔のように黒かった。

・・・余談だが、俺はコイツの笑い方が嫌いだ。

「黙って付いて来い」

・・・いや、こいつの全てが嫌いだ。

「それと、俺は先輩になるからな。敬語使えよ」

.....大っ嫌いだ。

三人で暗い廊下を歩く。

初めて通った時は恐怖で見る余裕が無かったが、ここは廊下の壁も白いようだ。ただ、辺りが薄暗いので廊下自体は暗い印象を受ける。それに.....窓がない。閉塞的な空間。

コツコツと足音が鳴る。まるでトンネルの中のようによく響く。

「いあーッ本当によかったよ。君たちが協力してくれて」

おいおい別にまだ協力するなんて言っていないぞ.....。

やっと言えるチャンスが来てここぞ！とばかりに反論しようとした。しかし、その声は言葉になる前に喉につかえてしまった。

あの射撃場が見えたからだ。白い壁。人型的。零夜とのやり取り.....。

まさか……。

射撃訓練させられるのか？

「あの……」

情けなく震えてしまった体と声。俺の考えていることが分かったらしい零夜はフツと鼻から抜ける笑みをした。震える俺をあざ笑うかのように彼はスタスタとあの射撃場の前を通り抜けてしまった。

よ、よかった……。

心の中でそつとため息をついた。

「あ。そうだ」

前を歩いていた突然朱雀が振り返った。ほっとして少し気が緩んでいたため俺の身体は、ビクツと跳ねた。刹那言葉を止めたが彼は苦笑いで流してくれた。

「棗君と花梨君だけだね。二人は“隆也が入るんなら入る”と言っていたよ。……君は二人に信頼されてるんだね」

朱雀はそういつて微笑んだ。その笑みが刹那寂しそうに見えたのはきつと気のせいだろう。

俺はすごく複雑な感情になった。俺が一つ頷けば、棗や花梨までもマフィアの仕事をさせられることになるんだ……。朱雀が言っ

いたことが本当ならば、俺達は人を殺さずにすむ。だけど、命を瞬で消すことが出来る道具を持ち、闇の世界に飛び込むことにはなる。

そんなの、嫌だ。

だけど・・・どうして俺は、断りきれないでいるのだろう。

俺の感情を読み取ったのか、零夜がボソツとつぶやいた。元々小さい声がさらに小さくなったが、俺はその声を聞き取ることが出来た。

「お前の所為じゃねえよ・・・。ソフィアが叶うまでの辛抱だ」

ソフィア・・・??

なんだろう。

人の名前・・・だろうか??

朱雀はその言葉を聴いて、零夜を鋭く睨んだ。零夜は一瞬不敵そうに笑った。

自分の思考に焦るばかりの俺は、その刹那のやり取りに気付くこと

ができなかった。

「ついたぞ」

零夜がまた白い扉を開けた。何もなかった壁が突然開いたり閉まったり・・・どこに何があるか全然分からない。俺はやっぱりまだ、此処には慣れないな。

・・・いや、一生慣れてやるもんか、と心に誓った。

「「隆哉ッ！」」

扉の向こうに足を踏み入れた瞬間にまた同時に声が。今度は叫ぶだけで終わったお馴染みの二人は零夜が耳に指を突っ込んで“うるせえよ、静かにしろ”と言つて黙らせた。

「あれ?? 棗、花梨、そのカッコ・・・?」

「ハハハ・・・どーよ、これ」

棗が両腕を広げて自分の姿を見せた。その顔には自嘲の笑み。花梨は俺が見詰めると目線を逸らした。

二人の格好は普段とは全く異なっていた。

此処に来るときは制服だったのに、今は二人とも黒い服を着ていた。

棗はノンフレーム眼鏡をかけていて、いつも無造作に固めてあった黒髪を後ろで緩く束ねていた。花梨は棗と同じ黒髪だったのが、赤茶けた髪ピンで後ろに上げていた。

全く雰囲気の違い二人。もしも知り合いが俺達を見ても一瞬では誰か分からないだろう。

その二人を見ながら、俺は急に世界が近くなったように感じた。今度こそ“違う世界に来たんだ”と分からされた気がした。

二人とも何処かでそう感じているのか、硬い笑みを浮かべていた。

「よく似合うよっ二人とも」

朱雀が目尻を下げて二人に言った。二人は小さく“ありがとう”ございます”とお礼を言った。今まで反抗的だった態度が一変していたことにまた驚いた。

「隆哉。お前、コレ着ろ」

いつの間にか部屋の奥にいつていた零夜が俺を手招きして呼んだ。俺は無言で近づいて指を指されたクローゼットの中を覗く。意外にもそこには沢山の服がかけてあった。俺はどれか分からなくてちよつとだけキョドると、零夜はまた鼻で笑って色々を取り出してきた。零夜が取り出したのは、とても動きやすそうな黒い服。ただ実用性を求めただけのもので、こんな服を着た人が街中にいたら何かあったのかと勘違いしてしまいそうなの。よく見ると零夜の服はこれと同じだった。

頷いて着替えだそうとすると朱雀が止めた。

「あーだめだめっ！隆哉はカッコイイからこっちだろ？」

胸の部分が大きく開いたシャツと穴の開いたジーンズ。俺が無言でその服を眺めていると、朱雀があれこれとアクセサリーとかを出してきた。

「ほれっ！！早く着ろよお」

手をヒラヒラふって朱雀が微笑む。

・・・なんだろ。いや、普通にセンスはいいんだけどさ。空気がチヨット凍ってる・・・。

なんで???

俺はそれ以上深く考えるのを止めて、素直に返事をして着替えた。服は少し大きく、今時って感じのスタイルになった。

「おー似合う似合う！！」

「あ、りがとうございます・・・」

そしてすべて着替え終わった今、やっと空気が凍った理由がわかった。別に服に問題があったわけではなかったのだ。

問題はアクセサリーだ。

皮ひもで作られたネックレスのトップは黒曜石になっていた。しか

も相当でかい、本物の宝石。輝きは黒く妖しいが、凄く高価なものだろう。

「・・・俺・・・こんな高価なもの着けられないッス・・・」

恐縮して声が震える。冷や汗がたらたら出てくる俺をみて零夜はまた笑った。

ニコニコと柔らかな笑みを絶やさなかった朱雀が、一言でその暖かい雰囲気を一蹴した。

「君に与えられる称号だよ【オブシディアン】。君は俺達ファミリーの要となるんだ」

ああ、俺達は・・・もう逃げられないな。

鋭い視線を感じながら頭の片隅で冷静にもう一人の自分が呟いた気がした。

【オブシディアン】

俺に与えられた称号

“キミは俺達ファミリーの要になるんだ”

「・・・【オブシディアン】・・・？」

「ああ、キミしかいないんだよ」

彼の言っていることが理解できず、言葉を鸚鵡返しに聞き返すことしかできない。

朱雀が微笑を浮かべた表情を真剣な表情に変えた。それだけの事で空気が変わったのだ。ああ、この人は本当に凄い人なんだ。と本能的に悟った。

ピリピリと張り詰めた空気の中、乾いた唇をなめる俺。朱雀がその茶色い一度瞳を閉じてゆっくりと話し出した。

「僕たちの世界がどんなに危険な世界かは・・・分かるね??」

「は・・・い」

「表の世界が平和な分、裏の世界は影として・・・時には人殺しも厭わない位 酷いこともする。僕たちの中にもルールはあるが何時でも敗れる様な状況。その、たださえ危ういこの世界の均衡。それが今、確実に崩れだしている。しかし、その危うい均衡を少しでも修正するために俺達は存在するんだ」

彼は自分の太腿にあるショルダーからアノ黒い物体を取り出した。酷く散漫な動きでその拳銃を目の前の俺にに向けて。俺は驚きと恐怖で体が固まった。零夜が“ボスっ”と呟いたのが聞こえたが、朱雀さんは零夜を手で制した。

「殺人や麻薬、他にも沢山の悪行。それを行いたいがために・・・。邪魔な俺達のような監視役のファミリーを潰して、悪をばらまこう

としている」

射抜くような視線と向けられた銃口。威圧感の中、夢だと信じ込みたくなる。

「俺はこの世界が嫌いだ。だけど、この世界でしか生きていけない悲しい奴がいる。そういう奴がいる限り、俺はこの世界を守りたいと思ってるんだ。彼らにこれ以上人を殺させないためにも……。表の世界が平和であるためにも……。」

震える声を絞り出して、抗おうとしてみる。無駄だと知っていながら。

「ッ　それと、俺達になんの関係があるんだ……?」

朱雀さんは口元に笑みを浮かべた。零夜のそれのようにぞっとする笑みだった。

「言つたらう。俺達のファミリーにはキミたちが必要なんだ」

ふいに朱雀さんは自分の手の中にある小型の銃に目を移して、目を細めた。憎しみの籠った瞳だ、と瞬時に思った自分に吃驚した。彼はもう一度俺と視線を合わせ、それから　くるりと持ち手を俺に向けた。

「こんなもの、平和を生きる君たちに持たせたくはなかった」

「……。」

「ああ零夜、そんなに睨まないでくれよ。ちゃんとと言えるから」

零夜の視線を感じて・・・彼は本当におかしそうに、あまりにも不釣合いな明るい笑みを零した。
俺達は動かない、否動けない。一呼吸でもおけば彼らの間に飲み込まれてしまいそうで。

「カタギである君たちをあえて俺のファミリーに引き入れようとするのか。君たちの才能は・・・悪いけど平和を生きるためにはあまりにも危険すぎる。いつか俺達のような闇の世界に巻き込まれていくだろう。実際何度もあつたんじゃないか？その度に危機を乗り越えてきたことだろう。だからこそ、君たちは裏世界では重要人物としてマークされ始めている」
「っ・・・!？」

・・・確かに、朱雀の言うとおりだ。
俺は曖昧にしか覚えていないが、どう見てもカタギには見えないヤツラと乱闘して・・・一人で倒れる彼らの真ん中に立っていたこともあつた。そのとき花梨と棗も少し離れた所でそれぞれヤツラを倒していた。

その数総数20名。一人約7人を相手に勝利を収めたのが・・・中学校1年のときだった。

「それぞれに覚えがあるはずだ」

隣を見ると二人は、目を見開いて朱雀を凝視していた。ありえないとでも言いたげな視線。彼の言っていることが真実だとありありと語っている。

「あえて闇の世界に引き入れるのは、君たちを護るためでもある。これ以上暢気に平和ボケしてられない。初見で俺が明らかに異質なオーラを感じるほど・・・君たちは危険だ。しかしそれは同時に大きな強みになる」

「強み・・・」

「俺の、夢。平和なんて甘い考えは捨てた。だけど、捨てちゃいけないものために・・・君たちが必要なんだ。俺の庇護下に入ってもらい、俺のために働いてもらう。君たちの能力は他のファミリーには毒になりうるが、俺達には必要だ。どういうことか、わかるよね？」

つまり・・・

俺達はこのままだと、殺されるかもしれないということ・・・か？

たどり着いた思考を裏付けるかのように、朱雀と零夜は頷いた。

「さて、今の話を聞いた上でよく考えてくれ。そしてどうか良い答えを・・・」

朱雀さんは銃を持っていないほうの手を自らの左胸に宛がう。薄い色素の瞳を閉じて、落ち着いた声を出す。

「俺の手とこの銃を取り、俺のファミリーとなるか??？」

それとも・・・死ぬか？

俺は思わず棗と花梨を振り返った。彼等の表情を見て心が定まった。彼の血が通っていないかのような白い手を取って呟いた。

「俺達が朱雀さんの役に立てるのであれば・・・ボス、俺達は貴方のファミリーに入ります」

俺達が生き残るためにも。

朱雀さんはゆっくり目を開けて穏やかな笑みをみせた。

胸に下げたオブシディアンが一瞬熱くなった気がした。

・・・気のせいだろう。

どうして、俺はこの時“マフィアになる”といったのだろうか。
どうして、朱雀さんの穏やかな顔を見て安心したのだろうか。

今でも、理由は全然分かってないけど。

ただ一ついえること。

俺は、後悔なんてしていない。

あの日、決断してから一ヶ月たった。

《 ツ隆。標的はエリア21 - 5Eにいる。しとめる》

短い機械音の後、棗の冷静すぎるほど冷たい声が耳に届いた。小さく“^{SUR}了解”と呟くと、ゴーグルの右端のボタンを押した。目の前に

自分の現在地と、さつき棗が言ったエリアの場所が映し出される。
ここからそう遠くは無い。

《 エリア移動。花梨、援護》

《 ツ Sure!! 》

極力短い単語で話すと妙に明るい声が帰ってきた。コイツ、ちょっと楽しんでやがる……。

フツと短いため息を漏らしてから、静かに……それでも速く走り出した。

今の俺の手の中には黒光りする拳銃が握られている。これで標的^{ターゲット}を獲らなければならない、という任務がある。
額に浮かぶ汗を服の袖で拭ってから棗の指示通りの場所の壁にそつと凭れ掛かる。

《 ツ行くぞ》

素早く身を翻しエリア内へ足を踏み入れる。

黒いスーツを纏った人物が焦った様に自らの銃をこちらに向けた。

俺はその武器に向かって撃ちこんだ。弾き飛ばされる銃。相手がひるんだその隙に相手の胸に向かってもう一発撃ち込んだ。

しかし。相手は超人的な反射神経で二発目の弾丸をよけ、自分の足元に有った木片をさほど遠くない距離の俺に向かって投げた。

「くっ」

自らに投げられたそれを反射的に腕で払ってから“しまった”と思
った。

ダンツという音がしたと同時に俺の左肩は赤く染まった。
やられた……。これで左腕は使えない。

銃口を男に向けなおし一発打ち込むが彼は俺をあざ笑うかのように
避けていく。右側から銃声が三、四回鳴り響き、男が飛びのいた。
花梨だ。射撃は続き、俺はそれに合わせて男に標準をあわせる。

ついに彼はエリアの端に追い詰められ、逃げ場が無くなった。

「おわり ツ!!!??」

最後の弾をうとうとした瞬間、足元が崩れた。

「隆哉ッ!!!??」

ダンツダンツ

べちゃっと左胸が濡れる感触。

ああ……。死んだ。

「まったく。卑怯だ！！なんだよッ足元崩すとか、拳銃三丁所持とか・
・・そんなのありかよー。・・・っと隆哉、大丈夫か??？」
「大丈夫。・・・っ痛あ」

思いつきり腰から落ちてしまいズキズキと痛むそこをさすると“ほ
らっ”と言つて花梨が手を差し伸べてくれた。その手を掴み反動を
つけて立ち上がる。

「お前等。・・・」

コツツと足音が聞こえ前方を見ると黒いスーツを来た零夜が両手に

銃を持って立っていた。

「チームプレイになっていない。隆哉、お前は攻撃が単調すぎるんだ。何度言えば分かるッ」

「でも、俺・・・」

「でも・・・じゃねえ！自分に出来る事を瞬時に判断し、すぐさま行動に移せるように反復を繰り返せ！何回も何回も言ってるんだろーがこの大馬鹿野郎ども！！！」

耳元で怒鳴られたわけでもないのにキーンと耳鳴りがした。おまけにゴンっと頭のとっぺんに重い拳を落とされてクラクラとめまいもプレゼントされてしまった。

俺の左肩と胸には赤いペイントがべっとり付着している。今の実践練習で俺は一回死んだ、ということの意味している。花梨なんか額のと真ん中。バンダナでふき取ってはいるがまだ赤い。他にも花梨の体には数箇所ペイントが付いている・・・っておい右手アウトじやん。さつき左手で撃ってたのか！！

しかし、零夜の身体にはペイントは全く見当たらない。

「花梨、お前は全体的に緊張感が足りんッ！！あと銃の乱射は危険だから止めるといつているだろう」

彼がそう怒鳴ると花梨は拗ねたように唇を尖らせ“でも、まあまあいい線行ってるっしょ？”と言って零夜に殴られた。

「痛ああ！！？ちよ、アイドルの顔殴るとか、マジ止めて！！」

「うるせえ！俺なんか三ヶ月も活動停止してお前等の面倒見てやってんだ。感謝しろボケナスがっ」

ジツと短い機械音。それから、穏やかな笑い声が耳に届く。

《 ツまあまあ……。零夜さん、その辺にしといて……。ア
ジト帰りましよう???》

《……。そうだな。今日は01シゴロクがメシ係……。か》

いつ取り出したのか、零夜が耳にインカムをつけて棗と話していた。それから“帰るぞ”と言って俺達を手招きしスタスタと歩き出しました。

「えー……。01がご飯係??今日もカレーかよお……」

「まあまあ……。それでもあのコは頑張ってるんだから、な???」

俺がそう言ってからフツと笑うと、彼はまた拗ねたようにそっぽを向いてから

「お前最近、笑い方零夜に似てきた!!」

と叫んで“行こうぜ”と笑いかけてきた。

……。それは勘弁して欲しいな。

残された俺は苦笑いを零して、彼らを追いかけた。

NO 8・(前書き)

三ヶ月近く放置してしまいました・・・。
でも小説内では一ヶ月しか進行していませんww

・・・すみませんでした!!

変わった日常

順応していく俺達

それでも笑っている

そつでもしないと壊れてしまいそつだから

「ちよっ・・・おいつゼロワン01!!なんで俺のカレーだけ具がはいってないんだよっ!!!」

「前回花梨が私のカレーを馬鹿にしたからであります。」

花梨の文句に即答した01。彼女の手元には大きな鍋とお玉があり、そして花梨の手元には具の無いカレーがあった。此処一ヶ月虐められるにも関わらず花梨は未だに大声で喚きとおす。

「いやいやいや！この間は俺なんもしてねえのにご飯なかったじやねーかよっ」

「あれは、棗様を馬鹿にされるような発言をしたからであります。」
「前から思ってたけど俺は呼び捨てで棗は様付け！？その差はなにさーっ！！」

「尊敬の違いであります。棗様の頭脳には私も感服であります。見習いたいのであります。」

今まで黙って話を聞いていた棗がクスクスと笑って“ありがとう、01”と言って彼女の頭を撫でた。すると01は機械的だった表情をほっと緩めてほんのりと頬を赤く染めた。

「なんだよその反応はああー！！！！」

叫ぶ花梨の口に“うるさいであります”と01はカレーを突っ込んだ。

此処はアジトの中でも幹部以上しか入れない特別エリア。

零夜との実践訓練を終えた俺達はエリア内に設置されている食堂で01の作ったカレーを食べる。そのあと、銃の手入れをしてからボスの所へ行き明日の指示を受ける。まあ此処最近訓練ばかりだが。。。

平凡な日常に溶け込みつつある非凡。

俺達はそんな環境で生きている。

「隆、明日お前達はステージだ。笑顔を忘れるなよ」

「はっ！！！！！！！！えっ！！？」

普段どおり朱雀に予定を聞きに行くと、爽やかな笑顔で迎えてくれた。しかし、その口から飛び出た言葉は俺の予想をはるかに上回る衝撃を与えた。

え……今とんでもない事を仰った??

「……ステージ、ですか??」

「ああ！！お前等は明日デビューする！！」

楽しみだなあ！絶対売れるぞ、と光が飛び散りそうなくらい輝く笑顔で朱雀は固まる俺に話しかける。俺はただただ朱雀の言葉に信じられない思いを膨らめます。

ああダメだ。

頭が真っ白になってく。

妙な浮遊感に足元がフラフラする。

・・・まただよ。なんでいつも俺はこうなるんだよ・・・。

このファミリアに入っても驚いたことがある。俺達のファミリア・・・ミリナードファミリアは表向きじゃ芸能事務所ということになっているということだ。

零夜は勿論、そのほかの役員もほとんどが世に出て活躍しているという。そのなかには芸能界にあまり興味の無い俺でもよく知っている人物の名前も多々あった。零夜なんか俺でもしってる名俳優だった・・・のに気が付かなかったのは、彼があまりにもテレビに映る【片桐嶺也】の姿とはかけ離れていたからだったからだ。

俺はただただ驚くばかりだったが、花梨は嬉しそうに叫んでいた。その後、棗に“五月蠅い”と鳩尾に肘を入れられていたが。

俺達も・・・ゆくゆくは芸能界に足を踏み入れることになると思うはしていたつもりだった。しかし、マフィアだけで相当覚悟が居る

のに、その上芸能界とは……。いざこうして、“デビュー”という話が持ち上がると正直怖い。俺見たいな平々凡々な人間が芸能界なんてものに踏み出してもいいんだろうか……。

というか、俺は人前に出て何かをするということが凄く苦手なのだ。緊張とか云々の問題じゃない。何て言うのだろうか　多くの人に見られていると思うと恐怖で頭が支配される……。とても言っただろがいいのかもしれない。

とにかく俺は……。ダメなんだ。

棗や花梨みたいに自信を持って何かに一生懸命取り組んでみたい。前まで全然思わなかったことが、この一ヶ月で強く思うようになった。

今までにない変化が……。次々と起こって。

少し怖い。

でも、それ以上に俺は期待してるんだと思う。
これからの生活と人生に。

・・・確信はないけど。

俺は、白く染まっていく頭の中で長い長い考え事をしてきたのだった。

ふっと目を開けると、そこは医務室のベッドの上だった。

・・・また気を失ってたのか。

ゆっくり身体を起こすと目の前には朱雀。予想外すぎて体が跳ねて、ベッドのスプリングがギシツと嫌な音をたてた。

「隆哉??起きて大丈夫か??」

「え、あ・・・はい、まあ・・・」

ショックで意識が飛んじやつたんだな。

はあ、とため息を漏らすと朱雀は茶髪を揺らしてクツクツと笑う。それから“おき抜けで悪いがよく聞けよ”と真剣な眼差しになって話を続ける。

「お前の芸名は【鷹】だ。忘れるなよ・・・忘れねーか。んで、棗は【迅^{ジン}】、花梨が【翔^{カケル}】だ。本当はもう一人いるが、それはあとで紹介するな」

「・・・もう一人・・・ですか??」

「ああ。お前たちも知ってるやつだよ」

最後に安心できる笑顔をくれて朱雀さんは立ち上がった。俺は慌てて立ち上がり頭を下げる。その動作もこの一ヶ月の間に習慣として身体についてしまったものだ。

・・・否、零夜によって無理矢理付けさせられたのだ。

しかし彼はこの行動をあまり芳しく思わない。いつも苦笑いをして“よしてくれよ”と言って俺の頭を撫でるのだ。

人として対等にいたい、と朱雀さんはよく口にする。彼等にフアミリーに入るといふ選択肢を出された時に彼が言った言葉と矛盾があつて、始めは少し戸惑つた。

ただ、この一ヶ月で少しだけ分かつた。

朱雀さんは俺達を気に入ってる。だからこそ、きつく縛りたくないのだ。

人間は「縛り」がないと、どうして良いのか分からなくなるものだと隼が言った。朱雀さんは俺達に余計な負担をかけたくないのだと思つ・・・。

「なあ、隆。お前は自分に自信があるか??」

「えっ・・・??」

気絶する前に考えていたことを彼の口から問われた。思わぬ言葉にとっさに答えることが出来ず声がつまってしまった。しかし彼は俺の答えを求めているわけではなかった。

「お前、自分がどれだけ魅力と才能に溢れてる人間だと思ってるんだって聞いてるんだよ」

その声色は何処と無く冷たくて、身震いするほど【朱雀】という人が恐ろしく感じる。俺はゆっくりと彼と目を合わせていく。

彼の目は泣きそうな位歪んでいた。

「俺の犯した過ちを・・・お前にはして欲しくない。だから・・・だからな」

今にも泣きそうな笑みを精一杯作った彼が、

「だから、自分に嘘をつくな。自分を信じて、思ったことをすればいい。そうだろ??」

息を呑むほど美しくみえた。

「・・・はい」

泣きそうな瞳はゆっくり瞬きをすると消え、代わりに明るい光が灯る瞳になった。それだけで俺はほっと息を吐き出す。

「っつーことで、隆哉・・・いや鷹。新しいメンバーのお披露目だ。女の子だぞ」

にやっと意地悪そうに笑って“お前のタイプだよ”と言った。違いますッと否定したら豪快に笑われた。

「まだ見てないんだから。わかんないだろー？そんなこと」

・・・ってか、朱雀さん俺のタイプ知らないでしょ・・・??

心の中でツツコミをして背を向けて歩いていく朱雀さんの左斜め後ろを付いていく。まあこれも何があってもすぐボスを護衛できるようにと零夜に教え込まれた物だが。

・・・女の子、か。

その子が俺達と一緒にデビューする子かな。

俺は少し内心ワクワクしながら表情に出さないように気をつけて少し歩を早めた。

朱雀に連れられて来た小部屋には既に零夜や花梨、棗が揃っていて
その他にも俺の知らない人が2人いた。

「ボス、こいつがオブシディアンですか」

「ああ。かつこいいいだろ??」

そういつて眼光の鋭い男に微笑みかける朱雀。

男は面白くないとでも言うように俺を睨みつけて、それから目を逸
らした。黒髪の銀色のメッシュが栄えて一瞬光って見えた。うん。
気のせいって分かってる。

隣に居る女性が俺に笑いかけて“ごめんなさいね”と謝った。三十
台前半くらいだろうか。大人っぽい雰囲気がかっこいい人だ。

「よろしくね、オブシディアン……。私は緋咲……。ヒサキと呼
び捨ててちょうだいね」

「え、あ……。よろしくお願いします」

戸惑いがちに出された手を握る。とても冷たい手だった。

「京。」

「え??」

目を逸らしたままだった男が突然言い放った。意味が分からず間抜けな声を上げると、意思疎通が図れないことがイライラするように舌打ちしてから続きを言った。

「・・・俺の名だ。だが、呼び捨ては許さん。たとえオブシディアンでも」

先ほどの男が唸るように呟いた。物凄い威圧感と敵対心に気圧されながらも“はあ・・・よろしくお願いします”とだけ返すと、男はフンと鼻を鳴らして顔を背けた。

・・・俺、嫌われてるのか。

小さくため息をつくと同時にヒサキが“こら”と言って京さんを小突いた。

京さんはたいして怒ることもせず機嫌悪そうに顔を背けたままだった。

あれ、ていうか・・・。

この二人・・・。

「やっと分かったのかよ！！【HANABII】だよっ」

花梨に軽いエルボーを喰らい、一瞬息が詰まった。いや、それだけが理由じゃないか。

「【HANABII】！？まじでっ」

京さんがまた小さく鼻を鳴らした。

人気歌手の【HANABII】の二人。

去年の締め歌合戦にもメインとして登場し、圧倒的人気を誇るユニット。

華々しいデビューから役10年。

熱狂的なファンが多く、花梨や棗も支持している。

まさか、この二人もマフィアだったなんて……。

驚きを隠せず口をパクパクさせていると、ヒサキは面白そうにくすくすと笑った。

「そんなにビックリしなくてもいいじゃないの。貴方達もじきに私達以上に成長することになるわ。ね、京??」

「……悔しいが、そうなるか。」

盛大にため息をつきながら京さんが答えた。

「はい、お待ちかねえ！！新メンバーの登場だよお」

パンパンと手を打って、自分とその後ろの扉に注目させるボス。全員がそちらを向くと“入って”といって扉を薄く開けた。

「はじめまし・・・て??」

裏返った声と共に部屋に入ってきた銀色の少女。

・・・え。

「『『伊織っ!?!』』」

「・・・隆哉・・・!!?!?それに棗に花梨!?!?なんでっ」

大きな目を更に大きく見開いて隆哉を指差す少女とも言える銀髪の彼女。

「なんで、つて・・・お前・・・」

「突然高校辞めちゃって!行方不明になって、皆心配してたんだよ!連絡の一つもよこさないで・・・なんだってこんな所でそんな格好してチャラチャラしてんのよ!!!!」

チャ、チャラチャラって・・・。

一息も休みをおかず一気に捲し立てる少女。

俺達のもう一人の幼馴染、高橋 伊織。ハーフらしく瞳には薄く碧が掛かっている。しかし、あまりそう感じないほのかに和を感じる端麗な容姿。本来は金色らしいが色素が薄いらしく銀色に見える髪の毛の持ち主。

こんなところで・・・会うなんて。

「えー、隆哉たち、伊織のこと知ってるのかあ??」

わざとらしい声がして彼をみると朱雀はヘラヘラと笑った。

俺が“朱雀さん・・・あなた・・・”と呟くと、花梨がぐつと手を突き出して俺を押さえた。棗がそつとため息をついて、伊織に向き直る。

「伊織、ここがどういいうとこか分かってる??」

一瞬息が詰まるような音がして、目を逸らす彼女。一回ゆっくり瞬きしてから、そつと微笑む伊織。

その仕草が美しいと思ったのはきつと俺だけじゃないだろう。

「わかってるよ、棗。マフィアの世界。大丈夫、私だって覚悟はある」

「ッ」

今度は俺達が息をのんだ。

いつも眠たそうにしている目が覚悟を写していた。

でも、その覚悟は

「私は両親を殺したこの世界が嫌い。だから、大嫌いなここで復讐をするの。大嫌いなマフィアに」

怒りと悲しみの覚悟。

「あははっ “大嫌い” か・・・まあそうだよ、うん。それでもいいよ」

重苦しい空気にやけに明るい朱雀の声だけが響く。彼の言い放った言葉に誰も反応を返さなかった。否、返せない。

ああ、KY・・・いや、わざとやってるから、この場合AKYって言うのか。とか何とか考えるくらい自分も相当混乱してる。一度俺と視線を外して、もう一度俺とそれを合わせた伊織はもう怒りと悲しみを奥に隠していた。だけど双子も、京さん達も・・・もちろん俺も、誰も伊織から目を離せなかった。

「・・・死んでも、遂げたい想いがある。何を使つてでも私はその想いを遂げる。だから、ここが私を利用するように私もここを利用するしかないの」

彼女は最後にそう呟いて“もういいですよ”と言わんばかりに朱雀を睨みつけてから踵を返した。部屋を出て行く銀色の少女の背には大きな闇が押し掛かっている気がした。

重い重圧だろつに。

決して救いを求めない・・・唄わない少女の姿。

自室のベッドに勢いよく転がりこむ。妙に柔らかいそれは俺の身体をフワツと包み込んだ。頭は脈打つように痛んでいるが目が冴えてしまつて眠れない。

「グループの名前を決める、か」

部屋に入る寸前に朱雀に言われた言葉を反復する。

伊織がメインボーカルで・・・俺がサブとベース。花梨がキーボードで、棗がギター。花梨はピアノでできるから大丈夫だけど・・・。俺はベースも歌も出来ないと言つたのに、ボスが“決定事項だから”とかいつて押し切ってきた。棗だつてそうだ。アイツもサックスとかしか弾けなかつたはずだ。あー・・・でもアイツもうサイボーグ化してきてるからなあ。意外とあっさり弾いちゃうかも。

いやいや・・・そんなことより、伊織だ。

・・・もう歌つて大丈夫なのかな。あんな・・・辛いことがあつた

のに。

親のための復讐、か。そんなことしなくていいのに。

ずっとカタギの世界で暮らしていれば、もう辛い思いしなくてよかったのに。

アイツは俺達とは違う。俺達は朱雀や零夜に拉致られて、もう戻れないと知って・・・ほぼ強制的にファミリーに入れられて。初めは何もかもが只管怖くて、慣れなくて。だけど気がつけば一ヶ月たつて・・・全部当たり前になった。

こんな非常識ばっかの世界なんかには、伊織自らが飛び込んでこなくていいのに。

そもそもどうしてマフィアになろうと思ったんだ。

死んでも遂げたい想いって・・・親のことだろう。復讐なんてマフィアじゃ無くても出来るはず。いや、そんなのはして欲しくないけど。

「だああ！！もうわっかんねーよ」

勢いよく仰向けに転がると真っ白い天井が見える。白い天井は開放感があるはずなのに、どうしてか俺には圧迫感しか感じない。

大きく深呼吸した瞬間、白い扉がノックされた。

「隆哉・・・ちよつといいか」

「どーぞお」

返事を返すと“間抜けな声出さなつての・・・”といいながら苦笑する幼馴染、花梨が入ってきた。

花梨は素早い動きで俺に歩み寄ると、ベッドに腰掛けた。そこで漸く俺が上体を起こして見るが、花梨は暗い顔つきで沈黙する。

「どした??」

何が言いたいかなんて分かりきってるけど、あえて聞いてみる。

「・・・わかってんだろ??」

ほら、やっぱりそうだ。

「お前は、いいのかよ・・・伊織がファミリーに入るなんて」

「・・・いいもなにも、俺が決められることじゃないだろ。俺達がどうにかして変わる 弱い意志じゃないだろうしな」

花梨は眉間に深く皺を寄せて苦悶の表情を浮かべる。伊織の辛い過去を知っているからこそその顔だ。今の俺もきつと同じ顔をしてるんだろな。

隣に座る幼馴染は白い天井を見上げて、独り言のようにポツリポツリと呟く。

「伊織の御両親・・・マフィアに殺されたんだな。俺は・・・二人が伊織の目の前で、死んだってことしか知らない」

「ッ・・・」

もともと伊織の家族と仲がよかつた俺達は、彼らが殺人事件に巻き込まれたと連絡があつて、すぐ病院に駆けつけた。そこで俺達が見たのは親戚や俺達の親に囲まれた伊織だった。いろんな人に声をかけられているのに、彼女は無反応、無表情でただずつと横たわる両親を見詰めていた。

俺達のほかに誰も居なくなつた部屋に夕日が差し込むとき、彼女はずつと俺達の隣で佇むばかりで。声をかけようとしたけど、どう言えばいいのか分からなくて。幼い俺達は少しだけ俯いて夕日に佇む伊織を見詰めることしか出来なかつた。

『もう……二度と唄わない』

一粒だけ零した涙とか細い声で言った言葉が忘れられないままずつと目に焼きついた。

「もうやめよう」

「え??？」

思いがけない言葉に間抜けな返事を返す花梨。

「伊織の過去のことを考えるのは。伊織の気持ちは伊織にしかわか

らないだろうし、無理矢理干渉しても伊織を悲しませるだけだろうしな」

「ッお前!!!」

目を見開いて一瞬で目を怒りに染めて、俺の胸倉を捻り上げて顔面同士を近づける。

「伊織を助けたくないのか!?!」

「助けたくないわけがないだろうが!!!」

俺も負けじと睨み返す。

「・・・助けたいからこそ俺は何も言わない。アイツが今何を考えていて何をしたいかなんて、情報の無い俺達がいくら考えてもわかんなーい。だったら俺達は伊織を支えてやるしかできねーじゃんか!!!」

「でも・・・そんなことしても、なんの解決にもならねーじゃないか!!!」

わかってるよ。そんなこと。

だけど今・・・俺達に出来ることは

「今の俺達には伊織の意思を変えることはできない。今の俺達は伊織が復讐に燃えて・・・人の道を外させないように、アイツのサポートに回るしかない。何時か、アイツが俺達に話したくなかったときに、ちゃんと話してくれるように・・・今、俺達がアイツの心を否定しちゃダメだと思う」

そう。アイツを支えるしかできないんだ。

そんな自分が悔しい。俺には力がないんだって改めて思い知らされる。俺だってアイツはこの恐ろしい道に来て欲しくない。だけど、どうしようもないんだ。

アイツを護って上げられる力が欲しい。

花梨は苦虫を噛み潰したような複雑な表情を浮かべた花梨は、俺と視線をそらせた。

「ツかんねーよ。おれは・・・アイツを・・・」

「・・・わかつてるよ、花梨」

泣きそうな目で俯く幼馴染の肩を一回叩いて、立ち上がった。

「俺達は、強くなんないといけないみたいだ。伊織や俺達自身を護るための力が要る。マフィアでも、業界でも、何があっても動揺しちゃいけない。隙を見せればマフィアでは殺されるし、業界では潰される」

「・・・ああ。そうだな」

花梨はゆっくりと顔を上げて緩く微笑んだ。

もう大丈夫だ。不安で一杯だった、こいつの目には小さいが決意の色が見えている。

座っている花梨に手を差し伸べる。

「・・・一緒に頑張ろう。何があっても、負けるな、殺されるな、潰されるな・・・上に上り詰めるための翼をもがれるな。上に行けば、耐えてきた全てが、俺達の“チカラ”になる」

今決めた。

「俺達のグループ名は【ツバサ】だ。皆で飛べるように。勇気が持てるように」

重圧なんかには負けてたまるか。

「ふーん、【ツバサ】かぁ・・・うん、いいね。それで決定」

眼鏡をかけて書類を眺めながら軽い調子で了承したボス。呆気に取りられて声がだせなくなる俺達の隣で零夜の深いため息が聞こえた気がした。ってか、絶対ため息ついた！

全員集合の令を出されて朱雀の部屋へ向かったのは、花梨と話した翌朝のことだった。大して考えることもせずには思いつきで【ツバサ】だと決めてしまったわけだが、流石にもっと考えろっていわれるかと思っただのに。

俺の隣には白い服に身を包んだ伊織の姿。彼女もビツクリしたように固まったままだったが、視線を感じたのがギギと固い動きで此方を向いた。刹那の間があって、整った顔が苦笑の形に歪んだ。

「ボス・・・いつも言っていますが」

「はいはい、ちゃんと考えてるよ。でも本人達の意味が一番大切だと思っただよね。ってか名前くらい変じゃなければ何でもいいですよ？」

「・・・名前のことではありません。貴方の態度の話です。」

“俺もこの名前に関しては文句を言つつもりはありませんから”と零夜まで言ってくれて、少しだけ顔がほころんでしまった。思い付

きだったけど、いい名前だと思ってるから。

全員の顔をみると、優しい表情で頷いてくれた。

「はい、ということで隆哉」

「ハイ」

朱雀に呼ばれ表情を引き締めて返事をした。彼はニッコリと笑って

「ステージやるって言ったこと忘れてない？」

そう言った。

・・・あ。

「・・・すみません」

「ボス。流石に今日は無理です」

「うん知ってる。冗談だつてー」

よかったあ・・・。

思わずほおつと息を吐き出してしまうと、棗と花梨が爆笑した。

「お前、そんなこと言われてたのかよっ」

「冗談って気づけよな」

「いやあ、ホントは【HANABI】と零夜・・・いや片桐 嶺也
と一緒にゲリラライブでもしてもらうつもりだったのになあ。【H
ANABI】が今日は無理って言ったからできなかったんだよ・・・

」

じゃあ、もし二人が無理って言わなかったら……。

双子が乾いた笑みを漏らした。

「まったく。あの方も無理を言われる……こんな新人たちに突然ス
テージなんてな」

京さんの呆れたため息と共に言われた言葉に心の中で何度も頷いた。
今俺達は【HANABI】の二人と零夜と共に見慣れた白い空間と
は違う部屋にいた。簡単に言うと……視聴覚室みたいところ。

グレーのカーペットにモノクロの壁、天井からぶら下がる変なマイ
クもあるし、楽器も一通り揃ってる。とりあえず自分の物だと指示
されたベースを手に取ると、ずっしりとした重みが手に染みた。

「でも言われたからには実行しないわけにはいかないだろう。」
「当然。そのために俺達もお前も活動止めてんだろ？」

その言葉に反応したのは双子の二人だった。“【HANABI】が

活動休止・・・”と綺麗にハモった声で呟いて二人して顔を見合わせた。あーあーお前等の考えてることよく分かる。自分たちのために二人が活動休止してまで面倒見てくれてることが嬉しいけど、しばらく二人の公の姿が見れなくて少し寂しい、みたいな感じ。その分二人のプライベートが見れるんだからいいじゃねーか。

そんな中伊織とヒサキは楽譜と睨めっこ中。昨日のうちに【HANABI】の二人が考えて作ってきた歌だという。すげえ・・・。“この音を にしたほうが・・・” “ええ、でもそれだと少し暗くなりすぎないかしら？” “大丈夫ですその分ギターを ”

あーあーあー、もうなんでそんな細かいことまでわかるかなあ。

せっかく手に持ったベースを弾く気になれず、元の場所に戻した。

「あ、いいもん見つけ」

ちょうど視界に入ったもの。暇なときによく弾くバイオリン。そんな簡単に弾けるもんじゃねーけど、まあガキの頃からずっと親に習わされてたんだからまあ当たり前。

顎にチンレストを挟んで弓で弾いて軽く音を出す。ちょっとずれてる音を調律して、深く息を吸ったところで、みんなの声が止まっていることに気がついた。

やべ、怒られる。

そっと零夜に視線を向けると、驚いた顔をした彼の顔とぶつかった。

彼のその表情が自分に向けられたことは一度もなく、逆に俺が驚いた。

「な、んすか？」

「……いや、なんでもない……続けてくれ」

続き……？

え、弾けっこと??

思わず回りに目を泳がすと、全員が何度も頷いた。伊織とヒサキ、双子なんか目キラキラしてるし。

みんなの期待に負けて、一つだけため息をついてから弓を持ち直した。と、ふと顔を上げて“花梨”と呼んだ。

「俺だけとかやだ。お前もやれ」

「えー……何？クロイツェル？」

「それでいーや」

文句を言いながらピアノへ向かう花梨にお前も道連れだ、と呟いてやった。途端に花梨は苦笑した。そして、そろーっと視線を外していく棗の肩にぽんと手を置いた。

「で、お前……逃げられると思ってんのか？」

「ちっ……分かったよ。間奏でいいんだよな」

「てかそれしかお前は入れねーじゃん」

俺と花梨だけだと寂しいから。お前と花梨と俺は三人でワンセットだ。

花梨と同じ表情をしながらサククスを手取る。

ベートーヴェンの“バイオリンソナタ クロイツェル”。俺と花梨と棗が好んでよく弾く曲だ。

この曲はバイオリンとピアノがほぼ対等の演奏をする。友達、みたいな感じでなんとなく好きなんだ。だけど俺と花梨だけだと不公平だから、落ち着いた間奏部分には棗のオリジナルの演奏が入る。これようやく“俺達の演奏”になる。

花梨のピアノの音が入って、目を瞑った。

せっかくだ、音に浸っていよう。．．．いつが最後の演奏になってしまうかわからないのだ。

俺達が飛び込む世界は、それほど危険なのだから。

「．．．やはり、お前等か．．．」

零夜が呟いた一言は、音に集中する彼らに聞こえることは無かった。

「うわぁ．．．久しぶりに聞いたけど、やっぱり凄いね！」

長い演奏が終わって疎らな拍手に包まれながら苦笑いをした俺達に伊織が嬉しそうに言った。その隣では口元に緩い微笑を浮かべたヒサキと、驚いた顔をした京さん。零夜は既に興味をなくしたかのようにギターのチューナーを始めていた。分かっただけだ．．．自分から言っというて酷いだろ．．．。

なんだか少し気落ちしてがっくりと肩を落とす俺の傍らで、興奮からか先程より一オクターブほど高い声で話す皆。

「ね、曲の随所に彼らの楽器を入れてみたらどうかしら？」

「俺はこいつらと合わすのはめったに無いですけどねえ」

「いいんだよ。サククスはそれだけでリード出来んだから」

京が呟いた言葉を噛み締めるように唇に弧を描く。彼がサククスを始めた理由は憧れの【HANAABI】の京が同じくサククスを得意としていたからであった。

「俺が、テメエにそれを教えてやる。ギターもサククスも俺の得意分野だ」

「そう？じゃあ私は花梨君と伊織ちゃんかしら。キーボードと歌は私の担当だものね」

あれ、じゃあ俺は・・・

くるりと振り向くとニヤリとあの笑顔を浮かべた零夜の姿。

「もちろん。」

ああ、その言葉だけで分かりました・・・。

「お前な・・・俺をなんだと思ってるんだ。」

「何って、バケモ」

「馬鹿！！」

ダブルで頭をはたかれて、自分がヤバイ橋を渡りかけていたことに気がついた。乾いた笑みを零しながら回れ右を試してみたが、時既に

遅く。

「いい度胸だな、隆哉。ベースとサブ、それと片桐嶺也の演技力。みっちり扱いてやるから覚悟しろよ?」

・・・やべえ、俺生きて帰れるかなあ・・・。

やあ、

羽休めの時は終わりだ

勇気を持って

自信を持って

空を仰いで

さあ

ゆけ

生き残るために

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1613e/>

I don't know

2010年10月14日18時30分発行